in plastic bag(877str×毒舌)

エイノジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｉｎ　ｐｌａｓｔｉｃ　ｂａｇ（８７７ｓｔｒ×毒舌）

【Ｎコード】
Ｎ７９１７Ｙ

【作者名】
エイノジ

【あらすじ】
とある火曜日。
設楽はマンションの下にゴミを出しに行くと、袋に入った成人男性を見つける。
このままでは燃やされる、マズイと思った設楽は自宅に持ち帰る。
仕事から帰宅した設楽は人間とは思えないゴミに手を焼くが、次第に愛情が湧いてくる……

？ ｄｕｓｔ（前書き）

設楽統…保健所に勤める２８歳。好奇心が強く、またドＳ。

有吉弘行…設楽のマンションのゴミステーションに捨てられていたゴミ。２７歳。

自己は犬だと催眠がかかっている。

日村…設楽の同僚。設楽とロッカーが隣。テンションが高く、親しみやすい。

小木…冷静で淡白。矢作が好き。現在矢作と同居中。

矢作…動物と小木が好き。多少のホモっ気がある。

ｄｕｓｔ

？ほこり。ちり。

？粉。花粉。

? dust

早朝、今日は火曜日だから燃えるゴミの日。
家中の紙くずと生ゴミを集め、一つの大きな袋に纏める。
汚れないように捲り上げた袖。
だぼっとしたスウェット。
すぐに脱げるサンダル。
まだ整えていない髪を掻き上げながらマンション下のゴミステーションに行く。
既に数個の塊があった。
ネットを持ち、俺のゴミも入れようとした瞬間、見慣れた形が半透明のビニールに包まれて置いてあった。
正確には捨てられていた。
体育座りをした成人男性が眠っている…ように見える。
事件だ！と俺は即座に思ったが、怖いもの見たさに、持っていた袋を置き、頬に触れてみる。
「あ…っ」
生きている。
ビニール越しに体温が指に伝わった。
「ちょっと待てよ…。今日は火曜日だろ？ていうことは燃えるごみの日であって、更に俺はここにゴミを捨てに来たんだ」
俺の持ってきたゴミはやがて収集車が来て、焼却炉にぽーんだ。
コイツ、骨だけになるぞ。
生きたまま燃やされるとか、熱いどころの騒ぎじゃねぇって。
「よいしょ…っと……」
意外と重いのね。

◇in plastic bag◇

持ち帰ったのはいいけど、俺誘拐罪とかで捕まらないよね？
「俺が誘拐犯ならコイツは露出魔ってところか」
ゴミ袋に入ったパンツ一丁の青年（というには年をとりすぎている）を解放した。
傷が所々に入っていて、でもそれ以外に不審なところは何もない。
「いやでも捨てられてたよなあ」

あ、ヤバイヤバイ。
仕事に遅れちゃう。
青年をソファーに運び、着替えて髪をセットして出ていった。
知らない人を家に置いとくなんて無用心かもしれないけど、その人だって知らない家に居るんだから、ビビって何も出来ないよね。

「おざまーす」
「おぉ」
俺が着いた時には小木さんと矢作さんはもう居て、二人とも煙草をふかしながら雑談に勤しんでいた。
軽く手を上げて挨拶を交わし、俺はロッカーに着替えに行った。
隣のロッカーの日村さんからコミュニケーションを取ってきた。
「あれ設楽さん遅かったね」
「うん。今日ゴミ出しの日だったから」
「え、何それ。ゴミ出すのに何分掛けてんの」
捨てるだけじゃなかったからね。
まさかゴミを捨てに行って、拾うとは思わないでしょ。
「あ、もしかして捨ててあるもの拾ったとか？そうでしょ、絶対そうだ！！」
「いや、まあ拾ったというかね…」
勘が鋭いんだから。

「ちょっと待って。俺が当てるね。大きいものでしょ！！」
「うん、まあ…大きいものかな」
「じゃあねぇ…家電だ！！そうでしょ、しかもスピーカー系じゃない？」
「いや、違うな…」
「大きくて家電で、スピーカー系じゃないとなると…」
いやいや。
「あの、日村さんちょっといい？」
「ん？何？あ、答え言っちゃダメだよ？」
「あ、そうじゃなくてね。家電じゃあ、無いんだよな」
「えっ？大きいものって…家電、」
「大きいものとは言ったけど、家電とは言ってないからね。それに今日火曜日じゃん」
「うん、火曜日だよ」
「火曜日ってことは、燃えるゴミの日だから、家電とかの粗大ゴミは出しちゃいけないから」
不思議な顔（言い方に語弊がある？気にすんな）をしていた日村さんが理解できたようだ。
「あー―、そう言えばそうだよね。成程ー。じゃあタンスとか？」
タンスも燃やさないかなあ、と思ったところで仕事が始まるベルが鳴った。

俺の仕事は保健所の、主に動物保護。
地域住民の方から苦情とも取れる連絡があった動物を一時的に保護している。
一定期間待っても飼い主とか現れなかったら、惨いけど殺したりもする。
でも、何でもかんでも殺したりしないよ。
最初は気持ち悪くて吐いてたけど、人の慣れって恐ろしいね。
そういう仕事があった晩でも焼き肉食べれたりするもん。

「おーよしよし、小木は可愛いねー」
また矢作さんの“小木ペット”が始まった。
保護した野犬達に朝ご飯を与える時、小木さんが矢作さんに思いっきり甘える（動物に嫉妬か？）。
ほんと気持ち悪いくらいに…。
「小木は可愛いねー。ほんと食べちゃいたいよ」
昔はこれにも吐きそうになってたけど、人間の慣れって怖いですよね。

「おい、食べな」
小さなケージに大きな体を丸めてうずくまるドーベルマン。
ここに来てから丸2日。何にも食べちゃいない。
スレンダーな体が貧相にさえ見える。
「食べなきゃ死ぬよ」
ドーベルマンなんて捨てる飼い主、信じらんないよ。
こんな恐ろしい目をした犬、責任持って最後まで育ててくれなきゃ、拾う身にもなってみろってんだ。
「俺の飯食うくらいだったら死んだ方がマシだってか？」
なあ、いつまでも意地張ってんなよ。

？ ｌｏｖｅ（前書き）

ｌｏｖｅ
？愛。愛情。
？好み。好意。
？恋。

? love

「ふー」
今日も一日頑張りました、と。

玄関を開けるまですっかり忘れてたよ。朝拾ったもののことを。
泥棒にでも入られたのかと思っちゃうくらい散乱した部屋に、思わず通帳と印鑑を確認した。
「あった。良かった…」
大した額も入ってないが、折角貯めてきたんだ、盗られて
『う〝ぅ…』
「え？…うわあっ！！」
我ながら情けない声が出た。
「ちょっともう何…、っ！！」
今朝拾ったゴミが襲いかかってきた。
あのまま放置されてたら今頃死んでんだよ？てことは俺、命の恩人じゃん。
何飛びかかって来てんの。
「ぐうぅ…」
威嚇？
敵意丸だしにされちゃ、近づこうにも迂闊に手を出せない。
敵意どころか、アレまで丸だしなんだけど。
家出る時にはちゃんと穿いてたよね、パンツ。
「あのね。敵じゃないんだ」
「ぐう〝あ〝ぁ！！」
ちょっとちょっと！言葉通じてないんだけど！！

「ああもうバカ…」
正面から真っ向勝負を挑んできたゴミを受け止め、誠にダサいが押

し倒された。
ゴミは俺の首に顔を埋めて、しつこくニオイを嗅いで、舐めた。
肩と腹を押さえつけられて動けない。
どんな腕力してんのさ。ビクともしない。
「あのー…」
チンコが思いっきり当たってますが。
うう…気持ち悪ぃ。
「あれ…え、」
さっきまで敵意剥き出しだったゴミが退いた。
そのままヒョコヒョコっと歩き、ソファーに跨がった。
三人掛けの白色に悠々と身を沈める。
「ちょ、ちょっと何してくれてんの。全裸はヤメテよ！」
「ふあー」
寝るのかせめて服を着ろ！！
全然言葉通じねぇじゃん、何コイツ、ムカつく！！

仕方なしにゴミに近づいて叫ぶ。
「俺、お前の命救ってあげたんだけど。お礼くらい言ってくれてもいいんじゃないの？」
ゴミはどこか小さな王国の王子ような態度と流し目でふぅん、と鼻だけで音を鳴らした。
どうやら喋れないご様子だ。
「お前ね、ありがとうございますって言えない…っ」
ああ、何だ。
何て目で俺を見るんだ。
吸い込まれそうな瞳、とでも言おうか。因みに１２００％美化での話で。
やめろ、俺をそんな目で見るな。
「…どうしてこうなるんだよ」

どうもこのゴミ、馬乗りが好きみたいだ。
俺のお気に入りのソファーもそこそこに俺に覆い被さった。
日本のどこに、ゴミを腹の上に乗せて喜ぶやつがいるものか。
「あの、退いてくれないかな？」
さっきから言葉は通じないと分かりきっているのに、こういう時、人は聡明になれない。
「あの、あのね…」
聡明どころか言葉も出ない。
右手に辞書を持っていたとしても不可能だ。
何故なら俺の右腕はゴミの太ももの下敷きになっているらだ。
や、もうあと数センチずれてたらと思うと恐怖で身震いする。

拾わなきゃ良かった

と、一瞬考えたが、それは死んでも言っちゃいけない。
俺が拾わなきゃ死んだ世界では誰も拾わない。
拾われなけりゃこのゴミ、今頃泣いても戻らない。

しかしこのゴミ、幸せそうに眠るね。
ゴミゴミって、名前でも付けてやらないと不便かな。

「あら俺ってば、愛着湧いて来てんじゃん」
ああもう最悪。

？　ｌｉｖｅ（前書き）

ｌｉｖｅ（１）

？住む。

？生きる。生きながらえる。生存する。

？暮らす。生活をする。

? live

「寒ぃ…」
朝目覚めるとゴミの姿は無く、これが夢だったら良いのにと思った途端、キッチンの方が何やらゴソゴソ動く。
また泥棒かと一瞬は頭を過るが、どうせアノゴミだろうと、重い体を持ち上げ物音のする方へ向かった。

昨日の片付けも済んでないのに、これ以上散らかされては困る。

「なあにして…」
ゴミに常識もとやかく言っても仕方ないけど、これは酷すぎる。
どこの人間が生の即席麺を食べますか、いいえ食べません。
食べるとしたらそれは人間ではありません。ゴミです。
そうか、だからコイツはゴミなのか。
「お前ね、ふざけるのも大概にしてくれるかな」
買った時のままビニール袋に入れていた即席麺（厳密には醤油ラーメン）のフィルムを破き、開き口が丁寧な示されているのに無視して真ん中から穴を開けた。
お湯でふやかされる前、塊の麺をバリバリ音を立てて齧る。
「行儀悪ぃから止めろって言ってんのが分かんねぇのかよ！！」
夢中になっているゴミの髪の毛を掴んで無理矢理剥がす。
「グぅああ！！」
逆ギレしてんじゃねぇよ。
「勝手に食べません。分かったか？」
あー俺将来いいパパになれそう。
やっぱ止めだ。
こんな子供欲しくない。

俺はゴミに「いっくん」と言う名前を付けた。
犬のいっくん。
ゴミの次は犬か、聞こえは悪いけど一応ヒトの形してるからそれなりの扱いはしてやろう。

「矢作さんちーす」
「ちーすじゃねえだろ。お前遅刻だろ」
やー、ギリギリセーフじゃないっすかあ？とか誤魔化しながら“小木ペット”の時間が終わった二人の間を通り、ドーベルマンの前に立つ。
貧弱になった体はげっそりという表現が似合う。
朝飯を出してもまだ動かない。
これで3日目だ。
そろそろ限界を越えているはずなのに、まだ自分に鎖を掛けて人間からのエサを食べようとしない（実際に動きを封じているのは俺たちの方なんだけど）。
俺たちの何がいけない。
捕らえたことが気に食わなかったのか？保護しただけだぜ、安心してくれよ。そう簡単には殺したりしないし、飼い主が申し出ればすぐに帰してやる。
まあ飼い主が来そうにないのが問題なんだけど…。
「設楽さん。…何ブツブツ言ってんの？」
「あ、日村さん…コイツ全然食べないのよ」
ドーベルマンは低く伏せたまま急に現れた日村さんの姿を目だけで追った。
「ああほんと、俺の贅肉あげたいくらい」
なにそれつまんない、と。
昔こうやって二人してアリの行列見たよね、と。

この仕事始めてすぐくらいだったっけ。
働いてるなーって、偉いなあって。
その後のら猫を触ろうとしたら日村さん引っ掻かれて、仕事辞めてやるー俺は動物に好かれてないんだーって叫んでたよね。
結局辞めずに働いてるね俺たち。

「なんか、生きてるってすごいよね」
「うん…」
生きてることがすごいと感じたのはお互いだから、結局どっちが言ってもよかった。
「生きてるってすごい…」
だからこの俺の言葉が反復なのか、オウム返しなのか、そんなものに意味は無い。
意味があるのは生きてるってことだから…

「辛気臭え！！」
「うわあ！！！！」
檻の中に閉じ込められた気高き犬を目の前にして俺たち、スケールのデカ過ぎる話して、
黄昏んのが気持ち悪くて、日村さんの背中、思いっきり平手で叩いてやった。
うん。期待通りのいい音。
本人は痛そうだけど…
「あ、立った…」
「何が！？クララが？」
「違うよ」
クララ以上の感動かもしれない。
煩く騒いだせいか、ドーベルマンは耳をピンと立て、背筋を伸ばして堂々と立っていた。

そのまま俺の差し出したエサに口を付けるまで、時間はかからなかった。

？　wolf（前書き）

wolf

？＞動物＜オオカミ。

? wolf

飼い慣らされたペットはどう足掻いても野性に戻ることはできない。
哭いても吠えても、人間が造り上げた自然に馴染めないもの。
特に犬はそうだ。
元々主人に忠実な性格だった犬種ほど本来の野性から遠い。
人間を嫌ったとしても、それは人間に飼われた経験のある奴らだからこその対応である。
猫は違う、んだろう。
犬は賢いからね、芸とか覚えさせよう、と家族かなにかがペットショップで話している。
お前らは捨てられた犬を見たことないのか。
賢すぎて苦しんでいるよ。バカだったら苦痛なんて感じることも無かっただろうに。

「エサ作戦で行こう」
相手はゴミステーションをも漁る卑しい下等動物だ。
優しく接してやれば、懐かしい思い出なんか蘇ってホロリだろう。

トラックを運転しながら立てた作戦が散った。

「ねぇ日村さん」
「なんだい設楽さん」
「コイツの犬種分かる？」
「まず“犬”種って言ってもいいのかな」
犬科であることは確かだろう、猫科じゃないはず。
「日村さん…囮になって」
「え！！俺！？」

そりゃないよ設楽～、とかなんとか言いながらついてくる日村さん。
いや、俺が歩き出した時点で囮にする気なんて更々ないことに気づけよ。
「取り敢えず作戦実行で」
ポケットからジャーキー（結構いいやつ）を取り出して、日村さんの口に捩じ込んでやった。

「ほーらよしよし、美味しい美味しいジャーキーだよー」
「こっちにはドッグフードもあるよ～」
…早くしてほしい。
野犬を餌付けてる変なオッサン二人が居ます！だなんて警察に届けられては堪ったもんじゃない。
「日村さんがバケモノみたいな顔してるから不審がって近づいてこねぇんだよ」
「ひでぇ！！俺の顔は生物の境界をも越えますか！！」
ちょっと下がってて、俺一人でやってみたい。
肉のついた胸を押し退け、一歩、また一歩と近づいた。
「ちょ…設楽、危ないって」
「大丈夫。俺って一匹狼みたいなところあるから、仲間と思ってくれるかもしんないし」
「俺とタッグ組んでるのによく言えたな」
野犬の扱いにはここ何日かでだいぶ学んだつもりだ。
待っててねいっくん、お父さんちょっと頑張ってくるから。
なんて、依存染みたことを思いながら、狼とドーベルマンだったらどっちが怖いのかなとか考えて、また一歩踏み出す。
「か、咬まれないように…っ」
咬まれるのが怖くてこの仕事が出来るか。
小さく千切ったジャーキーを地面に置き、少し退く。
また、同じくらいの大きさのジャーキーを俺の口に放り込む。

安全に食べられると教えてやる。
そうすると心を許しやすくなる、ここ２　３日で知った。

「ああもう分かった。俺が馬鹿だったよ」
「馬鹿なんて言ってないじゃない。馬でも鹿でもなくって狼だったんだから」
俺の置いたジャーキーを食べているところに、口を塞ぐ革製のベルトを巻こうとした時、手元が狂って緩かったらしい。
幸いにも外れはしなかったものの、少しは口を開くことが出来たので、左手の薬指・小指をやられてしまった。
「つーか何なの。あそこの住民は犬と狼の違いも分からないわけ」
「いやだって都会に狼なんていると思わないじゃない」
「あーもうやださいあく」
態とらしく伸ばしながら言ったら日村さんが気ぃ遣ってくれた。
「俺も病院付き合うからさ…ごめん」
すまなさそうに言うなんて俺らには似合わないじゃん？
俯いたり、声が小さいなんてアンスータブルだ。
「俺が検査引っ掛かったら絶対咬みついてやるから」
「う…うん」
「分かった？分かったなら病院行くぞ！！」
あ、帰り遅くなるかな…いっくん待ってるかな。

?sexy（前書き）

sexy

?セクシーな。性的魅力のある。

?sexy

「たーだいまー」
リビングの明かりを点けるとソファの上のいっくんが眩しそうに目を擦った。

「ただいま」
額から前髪を掻き上げるように頭を撫でると目を細くして気持ち良さそうにする。
そのまま首に巻き付いてぐでんと体重を全て預けられる。
目がトロンとしてきた。
このままにするとまた飯抜きで寝てしまうだろう。
「いっくん、風呂入ろう」
きょとんとした。
考えてみれば今まで風呂に入れたことなかった。
『人間』の扱いをしようと思っていたが、飯を食べた後は大概寝ているコイツを無理に起こしてまで風呂に入れるなんて考えは無かった。
これだけ睡眠を摂って、じゃあ日中何やってんだっていうと、何もしていないのだろう。
こないだの休み、いっくんが来てから初めての休日。
ただただずっとじゃれあった。

「おいで」
人間的とは一体何なのだろうか。
「ぅう…」
理性を持つこと？
「何、どしたの」
だったらそんなもの、機械に持たせればいい。

「嫌なの？」
欲を持つこと？
「うあ、あ」
食欲、性欲、物欲、私利私欲。
それは動物的ではないのか。
「いっくん…」

君が物を言えないのをいいことに、俺はキスをした。
そしたらまた真ん丸な目で俺を見るもんだから、通じない言い訳をまた口にしようとするんだろう。
「ごめんね。魔が差しただけだから…」
って、物が言えないやつに物を言ったって判るはずがない。
そう考えてもどうもコイツは俺の心を読んでいる。
読んだ上でまた口を合わせてくるから厄介だ。
俺は今までペットなんて飼ったことがないから、口と口が出逢う機会なんて人間しかなかった。
「ん、あ」
舐めるって愛だよねってバカデカイ大型犬飼ってた近所の小さいネエチャンが嬉しそうに話していた。
俺はまだその頃、職に手をつけていなかったから素直に聞き入れてた。

「いっくん、風呂…入ろ」
もう嫌がらなかった。
静かに怖いってのはガキでも空気読む。動物でも。
結局人間も動物もなんら変わらないんじゃないか。

唯一身につけていた下着を脱がせ（コイツの裸なんてもう見慣れた）、自分も脱いで浴室に導引する。
全身鏡に映った成人男性二人は妙に色があって不覚にもゲイに見え

た。
俺サイテーよ。
シャワーを捻ってお湯を出すと興味を示して寄ってくる。
手足に引っ掛けてやると喜んで頭から突っ込んできた。
「気に入ってくれた？」
飲もうとするいっくんの口を無理矢理閉じさせて、バスタブにお湯を貯め始めた。

お湯を張ったバスタブにいっくんをブチ込むと嬉しそうにバシャバシャ遊んでいる。
俺も、と思っていっくんの背後から入ると湯が溢れた。
すっかり慣ついたいっくんは俺に凭れ掛かってくる。
「あのね、俺そろそろ限界だからそういうのやめてほしいんだけど…」
いっくんが来てからきっと俺はホモ度が上がったんだろう。
じゃなきゃパソコンでゲイの動画なんて探したりしない。
「ちょっと…ごめんね？」
いっくんのイチモツに手を伸ばす。
何も分かってない顔が罪悪感を掻き立てる。
キスしたり掻いたり、俺はほんとにサイテーだ。
「…！？」
扱くと全身に力が入った。
ビクンと震えて驚きと信じられないといった顔で俺を見る。
安心させる為に左手で胸を撫でると心臓がバクバク言ってるのが分かった。

「…風呂の中で出しちゃおうか」
我ながら中学生みたいな発想。
「う、……ア…あ」

乱れた呼吸の合間から聞こえる下手な喘ぎにそそられて俺も体積を増した。
内腿が痙攣するみたいに震え出したから、いっていいよ、と落ち着いた口調で射精を促した。

性欲なんて酷いもんだぜ。
好きな人のやらしい姿見るだけでお腹いっぱいになって食事も要らなくなってしまうんだからさ。

？　ｔｉｍｅ（前書き）

ｔｉｍｅ

？時。時間。

。

。

。

？よい時にやる。

? time

「こら！待ちなさい、いっくん！！」
風呂上がりに丁寧に体を拭いてやったら、服も着ずに部屋へ帰っていった。
追いかければ良いがそうもいかない。
いっくん優先な俺はまだ全身びしょ濡れでこのまま歩けば床まで濡れてしまう。
「いっくん！！いっくん！！」
その時だった。
俺の叫び声を止めるインターホンが鳴ったのは。
もっときちんとした人だったならいっくんに頼むけど、そうもいかない。
知能というものが無さすぎる。
『設楽さーん、隣の田中ですーぅ』
「は、はあい！！」
やべぇ、俺なんにも着てねえ。
取り敢えず濡れていたがスウェットを着て、急いで廊下を走る。
「！！」
キッチンで鍋が落ちる音がした。
「こらいっくん！！」
『…設楽さーん？』
「あ！！…田中さん、ちょっと待ってください！！」
ああもうどっち行ったらいいんだよ！！
玄関へと続く廊下で踵を返したり、また返したり…右往左往している自分が焦れったい。
一度キッチンへ戻り、いっくんの姿を確認した。
「いい。ここに居てね。絶対だよ」
きつく約束して、田中さんの元へ早足で歩き出す。

『設楽さん？入りますよ？』
このお節介ババア！！勝手な入ろうとしてんじゃねぇよ！！
「はい！今行きますから！！」

と思った時。
今行こうと思った時。
思春期の学生が「勉強しなさいよ！！」と母親に言われて「今やろうと思ってたのに、あーあ言われたからやる気なくなったー」くらい絶妙なタイミングで。

「…だからダメって言ったじゃんか」
「ぐぅう…」
喉を鳴らしてかわい子ぶったって許さないんだからな。
許否云々じゃなくて言い訳が立たない。
「まあ…！！」
「いえ、あの、違うんです」
て何が違うんだか。
全裸の男に背後から押し倒されて鼻の下伸ばしてる男なんて目も当てられない。
いっくんがぎゅうぎゅう抱きついてきて苦しい。
成人男性に不意打ちでタックルされて生きている俺を褒めてください。
…。
「あらやだ。最近騒がしいから部屋に動物連れ込んでるんじゃないかって噂だったんだけど、お友達だったのね。失礼」
「友達ぃ？」
端から見ればそう見えるのだろうか。
隣のババアは、いいもの見れちゃった若い男の…、とでも言いた気な高笑いをしながら帰っていった。

上に乗られて抑え込まれているところを、うつ伏せから仰向けに変えて、呑気なコイツを咎める。
「お前知らない人に裸見られちゃったんだよ」
こっちは怒ってんのに、なんにも気にしない風に俺に色目を遣ってくる。俺なんか嫉妬でどうにかなっちゃいそうなのにさ。
ぐちぐち言っても暖簾に腕押し、上に乗ってるからっていい気になりやがって、上体を反らして女王様気取り。この傲慢なヤツを泣かせたくなる。
さらにこの体勢が騎乗位みたいでそれどころじゃなくなり、指を一本、唾液で濡らしてから腰を上げさせる。
やっぱ入んねえかな、てな考えが頭を過った瞬間。

ほんと、狙ってやってんじゃねえかな。
「うえっくしゅ」
風呂上がりに何も着てなかったらそりゃ湯冷めするよ。

ぶる、と体を震わせて廊下に寝そべる俺には目も暮れずリビングへ去っていった。

お気に入りの毛布に包まってソファーの上でガタガタ震えるいっくんにフリース素材の上着を着せる。
「だから言ったじゃん」
耳を真っ赤にして場都が悪そうに黙っていた。
「飯作ってくるから脱いじゃダメだからね」

作り終えて戻ってくると服はきちんと着てあった。
流石に寒いのに脱ぐはずないか。
「飯できたよ」
ローテーブルにご飯と味噌汁と、肉と野菜をざっと炒めたものを運び、ソファーで項垂れるいっくんを起こす。

そんなに眠いの。
毛布にくるまったまま身動き一つしない。
「いっくん」
肩を叩き、中々起きないから強く揺すぶった時。
力がない人形のようにどこからともなく倒れるもんだから慌てて支えた。

忘れてた、コイツ意外と重いんだった…

「はぁ…、あつ…」

？ ｆａｃｔ（前書き）

ｆａｃｔ
？事実。

? fact

俺はどうも現実には興味がないらしい。
現実よりも空想や妄想のような利己的な方が楽だし楽しい。
苦しいことから逃げようとしていることが、目の前に非科学的な存在を出現させているのかもしれない。
なんだって大量の動物の死体を見るのか。

朝から憂鬱だった。
同居人が風邪を引いたらしい。
病院に連れて行こうにも身元も分からないし、診察券は疎か保険証さえないからどうしようもない。
それに俺は仕事に行かなければならなかった。
休めないことはなかったけど、今日休んでは仕事仲間も大変だろうから休めなかった。
「まあ、その…残業にならないよう、てきぱきと働きましょう。以上。解散。」
矢作さんの解散宣言を切っ掛けに皆重い足取りで朝食を配りに行く。
そりゃ嫌に決まっている。
誰も抵抗出来ないか弱い動物を虐殺だなんて、いくら仕事だと言っても酷すぎる。
恨むなら自分たちの元主人を恨んでくれよ。
「あー当たりたくねぇなあ」
日村さんが隣でエサを与えながらぼやく。
午後2時からの出発で、まだ参加する役員は決まっていない。
決まっているんだろうけれど、俺たちには知らされていない。
「そんなの誰だってやりたくねぇよ」
初回よりはいくらか慣れたと言え、苦しいものは苦しい。
だからこの仕事をしている人は全員と言っていいほどペットなど飼

わない。
飼っちゃいけないことはないけど、そんなの説明されるまでもなく飼わないんだ。
例外として、中村さんというお爺ちゃんは亀を飼っているらしい。
まあ亀なら有りか。
啼く動物はダメだな。あと目を合わせてくるやつ。
体温があって、構ってちゃんで愛嬌があって…
「設楽さん？」
「え？あ、あぁ…」
「大丈夫？ボーッとしてたよ」
「大丈夫、大丈夫」
思い返してみるといっくんはすごくダメな存在だ。
俺の仕事の妨げになるだろう。
『ぐうぅ…』
「お前はまだ大丈夫だからな」
このドーベルマンはまだ期日がずっと後だ。
でも、期日まで長いからといって助かる可能性が高いとは一概に言えない。
迎えから来るか来ないかが、助かるか助からないかになってくる。
だけど殆ど此所の動物たちは迎えが来たことなんてない。コイツだってきっと…
「設楽…ちょっといい」
「あ、なんすか」
矢作さんに話し掛けられたってことはもう分かってるんだけど、優しい真実を求める。
だって嫌だもん。
「今回の…その、お前だから」
「ですよね」
「あと日村も」
「え！！俺も！？」

「っるせーな」
「すんません…」
俺に災難が降りかかってざまあとでも思っていたんだろう。
飛び火が日村さんの身に襲いかかった。
「てことだから、よろしく」
矢作さんはぽつりと呟いて去ってしまった。
よろしくと責任転嫁みたいに言われても実際本当に辛いのは矢作さんだから、俺たちは絶対に文句は言わない。
「俺たちかあ…」
「残業決定だよなあ…ちゃんと残業手当出んのかな」
冗談じゃない冗談を言いながら、でも頭の中ではそれどころじゃなかった。

今朝、家を出る時のお見送りが無かった。
寧ろ無理矢理布団に押し込んで汗を垂らしているところに此方から優しくキスして出掛けた。

昼飯はガツガツしないでゆっくり咀嚼しながら食べた。
腹八分目、ゲロ吐かず。
小木さんの名言。

小型犬４匹を部屋に追いやった。
――どこに行くんですか？
クソ、俺の目を見るな。
――この部屋は何ですか？
いいからさっさと入ってくれ。
――僕たちはどうなるんですか？
ごめんな。
――なんでそんなこと言
『キャンキャン！！』

重い扉を閉めると一気に哭き始める。
此所が危ない場所だってことが本能的に分かるんだろう。
『―！！　　！！　　！！！！！』
一頻り哭き終えた犬たちは、自らの死を目の前に黙り込んだ。

「設楽…」
矢作さんが俺の名前を呼ぶと、脳裏に熱に喘ぎ苦しむ姿が浮かぶ。
涙を流しながら口を閉じたり開いたりして、呼吸を求める。
体を強張らせて出来る限りの力でシーツをくしゃくしゃになるほど握って
「設楽？」
再び矢作さんが俺を呼ぶ。
「え…」
このボタン一つ押すだけで、俺は４つの命を軽く奪うことができる。
「早く…」
急かされる。
いや、奪わなければならない。
俺もお前らもなんにもしてないのに。
どうして苦しまなきゃいけないんだ。罰せられる人は他に居るはずなのに。
「情でも湧いたか？」
矢作さんが焦る理由は、上の人間がいるから。
土田っていう強面で図体がデカイ（でも意外と優しい）やつが見張るようにして立っているから。
「おいおい、マジかよ」
それはこっちが言いたい。
マジかよ、情？
あいつらの担当は一回も当たってなかったはずだ。
それも踏まえて矢作さんは俺に任せた。
なのに、

ああ、やっぱ目を見たのが悪かったんだろうな。
「ボタン押すだけだろ？」
「…土田さんにしたらそんだけかも知れないっすけど、っ」
「口答え？」
「いえ、何でもないです」
頭がクラクラする。いっくんの風邪でも感染ったかな。
足元が覚束ない。
胃から、胸から込み上げる昼食のおかず。
酸素を求める口から入るのは二酸化炭素が多く含まれた空気で、それじゃあ呼吸が出来ないからさっき吸ったまだ酸素が多く含まれていた空気を吐き出す。
そしてまた吸い込む空気は、更に酸素濃度は低くなっている。

「俺がやります」

しゃがんで息をはあはあ言わせている俺に代わって日村さんが申し出た。
ボタンの上に軽く乗った俺の手を優しく退けて、日村さんは黙って二酸化炭素を部屋に入れた。

…痙攣しながら泡を吹き、地面に転げ回りながら足をバタつかせる。
次第に動きは小さくなり、最後には動かなくなって炎の中に消えて、出てきた時には小さな体がより小さくなって骨のカケラになっている。
こんな酷い悪夢、誰か起こしてくれよ。

？　ｓｉｃｋ（前書き）

ｓｉｃｋ（２）

？（犬などを）けしかける。

？（犬に命中する語として）攻撃する。

? sick

「もう帰っていいよ」
呆れられたのだろうか。
仕事のできない人間は必要ないと。
「日村、設楽送ってあげて」
「え、俺まで抜けちゃって大丈夫なんですか」
「大丈夫大丈夫。俺と小木でなんとかやっとくから」
こんなに迷惑掛けて、最低人間にも程がある。
二足歩行が出来る能力も無駄遣いだ。
「設楽さん、立てる？」
這って歩いた方が相応しいんじゃないかな。
「大丈夫です。俺も仕事に戻ります」
動物たちの処理を報告と記録しなければならない。
それはすごく面倒で、また手間だ。
「いいよ、帰って健康管理してくれ」
まだ反論できたけど、頭を垂れて土田さんのところに歩いていく矢作さんを見たら何にも言い返せなかった。

ロッカーで着替えている間、気を遣って日村さんが話し掛けてきたけど、放っておいてほしかった。
下手なフォローは却って傷ついた。
俺には生き物さえ殺せない。
生き物を殺すように仕向けた人間を説得することもできない。
なんだって俺は

一人で帰れると日村さんに言ったけど、矢作さんに頼まれたからとか言って家の前までついてきた。
「ほらちゃんと帰れたじゃん」

「俺が居なかったら寄り道したり、考えなしにフラフラしてたでしょうよ」
なにそれ。

別れ際の恋人みたいに間が抜けている。
「…上がってもいいかな」
「なんで」
「ダメかな」
「うん…今日はちょっと」
少し間を置いて、
「じゃあ明日は」
今日も明日も変わらない。
俺の生活の一部にいっくんが居る間は日村さんを部屋に上げることはできない。
いっそ暴露でもしちゃえば楽なんじゃないかと考えたけど、そうしてしまえば日村さんまで俺と同じ症状にしてしまうかもしれない。
それだけ俺はのめり込んでいた。

「設楽、」
「なに、や…ダ！！ちょ、何」
「痛い痛い痛い痛い！！！！！」
迫り来る日村さんの胸の肉を摘んで捩る。
ぐにに、捻る音が聞こえてきそう。
「ごめんなさい！！設楽さん、設楽さん！！」
「…俺は日村さんのこと好きだけど、そういう好きじゃないんだよ」
ゆっくり手を離し、カバンから鍵を取り出して差す。
「ごめん」
脂肪がついた体が俺を抱き締める。
やめてよ。俺が悪いみたいじゃん。
俺が我が儘みたいじゃん。

それに日村さんったら顔に似合わず行動が二枚目、付き合いたてのカップルじゃないんだから。
「すきだよ統」
普段から蕩けた顔してるのに、それ以上に蕩けそうな台詞を決めてくる。
回っている手の甲を軽くぽんぽん、と2回叩いてありがとうと一応礼だけは言って部屋に帰った。

俺はホモじゃない俺はホモじゃないと呟きながら、靴を脱ぎ捨てリビングに入る。
求めた存在の姿がなく、辺りをきょろきょろ見渡してから思い出した。
寝室に運んだのだった。
その姿を見て早く安心したい。
だけど、いざいっくんを見たら、襟元を掴んで強引に唇を奪っていた。
顔から熱気が伝わってきたけど、風邪を引いたとか関係ない。
寧ろ汗かいた方が治るんだぜ、ちょっくら俺と運動しようじゃないと。
ベッド脇にある小さな箪笥の引き出しからローションを取り出した。
布団を剥ぎ、ズボンを下着ごとずらすと見慣れたはずの性器に生唾を飲む。
カタカタ振り、濃い薄いを一様にさせ、手に摂る。
冷たい。
指と指の間で擦り、ヒトの出口へと触れさせる。
一本…二本とスムーズに入り、柔らかい肛門を指先で探検して、
未知の感覚に奥へ奥へと進める。
呼吸が乱れ、文句を言ってる風から喘ぎ声に変われば、歯止めは効かない。
「嫌なら嫌って言えよ…？」

ズル賢い俺は保険を張った。
喋れないのに、文句一つ言えない者に俺は本当に良く言えば賢い。
悪く言えば、狡賢い。
「あぁ…っ、はあ…」
ほら、嫌って言わなかったからだよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7917y/

in plastic bag(877str×毒舌)

2011年12月31日16時56分発行